答　辞

寒さの残る中にも、耳をすませば かすかに春の足音が聞こえてきます。三月の風に思いを乗せ、今日、私たちはこの川之江高校を巣立っていきます。

私が育ったこの場所で　与えられた 温かい無数の贈り物
そこにはたくさんのカタチが存在する
「愛のカタチ」
何気なく受け取り大切な人へ贈る愛は
私を成長させ強くする

これは、私が青春のすべてをかけた書道パフォーマンス甲子園で、仲間とともに書いた言葉です。私たちは、これまでたくさんの人から「愛」を受け取ってきました。何気なく受け取り、そして自分から大切なひとへ贈る、そんな「愛」のやりとりを通して、私たちはここまで成長してきました。

私が初めて川之江高校の書道パフォーマンスを見たのは小学生の時です。真剣に、そして本当に楽しそうに書を書き、演技をする姿に、一瞬で心をつかまれました。私も川高の書道部に入り、みんなに感動を与えるパフォーマンスをしたいと強く思いました。

その夢が叶い、期待に胸を膨らませながら臨んだ入学式。しかし、その頃から新型コロナウイルス感染症が蔓延し始め、思い描いていた高校生活は音をたてて崩れていきました。昼食時は自分の席で黙食、マスクを外して大声で笑うこともできず、私たちは一度も校歌を歌ったことがないまま、今日を

迎えました。毎日、感染対策に追われ、不安を抱えながら我慢ばかりの日々。私たちだけでなく、日本中が重苦しい雰囲気に覆われていました。

それでも、私の心にはいつも消えない光がありました。授業が再開し、憧れの書道部の活動もようやくスタート。しかし、その年の書道パフォーマンス甲子園は中止となりました。先輩の無念をはらそうと懸命に練習しましたが、二年生の時は予選敗退。悔しくて悔しくて、涙がとまりませんでした。

そして先輩方が引退し、私は部長に選ばれました。今年こそは書道パフォーマンス甲子園の本選に出場する！　三年生になった私たちにとって最後のチャンスです。家族や友達、先生方、地域の方々から受け取ってきたさまざまな「愛のカタチ」を、私たちの書とパフォーマンスで表現したいと思いました。それなのに、練習すればするほど課題が出てきます。何が正解か分からない中、自分たちの表現を考えなければならない苦しみ。部員の気持ちがバラバラになっているような不安。部長である私が何とかしなければならないのに、自分の思いをうまく言葉にできず、情けない気持ちでいっぱいでした。　そんな時、一人で思いつめる私に気づき、話を聞いてくれたのが顧問の先生でした。先生に助けてもらって私の思いをみんなに伝え、再び全員の思いが一つになりました。

本選出場校の発表はオンラインで行われました。緊張のあまり画面を見ることができず、三年生みんなで手を握り合って顔を伏せる中、「川之江高校」の名前が呼ばれました。やっと夢が叶った。先輩方との約束が果たせた。一年前とは違う涙があふれ出しました。

書道パフォーマンス甲子園の本選当日は、今まで支えてくださった方々への　感謝の気持ちをすべて演技に込めました。

心地よい緊張感とそれ以上の楽しさで、あっという間の六分間でした。仲間とともに夢に向かって走り続けた日々は、かけがえのない私の宝物です。川之江高校書道部だからこそ、こんなにも充実した三年間を過ごせました。ここまで頑張ってきて良かった。心からそう思いました。

卒業生のみんなも同じ思いを持っているのではないでしょうか。部活動と勉強の両立に苦しみ悩んだ人も多いでしょう。運動部は勝負がついてしまうもので、文化部は表現力が問われるものです。ともに練習し、戦ってきた仲間にしか分からないものもあると思います。楽しいことばかりではなかったでしょうが、これまでの見えない努力が、いつか自分が困難に直面した時に力になってくれるはずです。私は、そう信じています。

三年間の数々の学校行事。コロナ禍で時間や規模が縮小されて、入学前に思い描いていたものとは違ったかもしれません。それでも、先生方はさまざまな工夫をして、可能な限り実施してくださいました。諦めかけていた修学旅行も、四国内で一泊二日の日程で行くことができました。時期も場所も変更して実施するには、たくさんのご苦労があったと思います。私たちのために尽力してくださったこと、決して忘れません。

最も心に残る行事は、三年生の時の体育祭です。今年は初めての五団編成となり、青嵐、赤光、黄道に、緑星と紫苑が加わりました。グラウンドに五色の団Tシャツがそろった景色は壮観で、私たちの代から新しい川高の体育祭が始まるんだと感じました。そして、応援合戦。同じクラスの仲間で優勝という一つの目標に向かって練習を重ねましたが、意見が違うこともあり、順調に進む日ばかりではありませんでした。

それでも、団長・副団長を中心にみんなで協力し、本番の演技を終えた時の達成感は何ものにもかえがたいものでした。私は太鼓を担当しました。本番前、緊張で震えながらペアの友達とグータッチ。張り詰めた空気のなか、思いっきりたたく太鼓の音に合わせて、みんながきれいに動きを決めてくれる、その一体感に鳥肌がたちました。

体育祭でもう一つ忘れられないのはフォークダンスです。入学した時から三年間、ずっと私たちを見守ってくださった学年主任の髙橋先生。時には厳しく、でも温かいまなざしで私たちが進むべき道を指し示してくださいました。サプライズでお呼びした時、驚きながらも　楽しそうに一緒に踊ってくださり、みんなの笑顔があふれました。先生の存在は、私たちにとっていつも心の支えでした。

高校での日々はあっという間に過ぎ去っていきました。私にとって、この三年間は自分自身を強くしてくれた年月でした。卒業生のみんなにとってはどんな三年間でしたか。何かの縁で私たちはこの川之江高校で出会い、ともに過ごしました。みんなと一緒に過ごした時間や作り上げた思い出は一生忘れません。

今、この卒業式の様子をオンラインで見てくれている後輩の皆さん。これからの川之江高校はみなさんにたくします。川高の新たな歴史を刻んでください。そして皆さんが卒業するときに、川高に来て良かったと胸を張って言えるように、今を全力で楽しんでください。

十八年間、大きな愛情で私を育ててくれた大好きな家族。私がやりたいと言ったことは、いつも応援してくれ、全力で

サポートしてくれました。心配や迷惑をたくさんかけたけれど、どんな時も味方でいてくれたね。四月からは離れ離れになるけど、父さんと母さんがつけてくれた名前のように、誰からも愛される 海のように心の広い人になれるよう、まっすぐに生きていきます。

たくさんの思い出のつまった高校を卒業し、私たちは新しい道を歩き始めます。期待に胸が高鳴りますが、同時に先が見えない状況に不安な気持ちにもなります。そんな時、私は好きなアーティストの歌詞を思い浮かべます。「まだ見えない道を　To get a break　切り拓け」新たな環境でそれぞれのスタートを切る卒業生のみんな。多くの壁や不安があると思うけれど、この歌詞のように、それを自分の力で壊して、見えない道を切り拓いていきましょう。

最後になりましたが、このような立派な卒業式を挙行してくださった先生方には、感謝の気持ちでいっぱいです。思えば、いつも 多くの先生に支えられ導かれて、ここまで来ることができました。三年間、本当にありがとうございました。

先ほど、担任の先生方が心を込めて呼んでくださった私たち一人一人の名前。そして、その呼名に 返事をして応えることができたことを心から嬉しく思います。

かけがえのない思い出を胸に、私たちは明日から新しい一歩を踏み出して行きます。

令和五年三月一日

卒業生代表　西岡　愛海